

第1回ミーティング「家と暮らし～本質を見つけるために～」



木のいえ一番振興協会は11月16日（水）、風來講堂（東京都渋谷区）において、第1回ミーティング「家と暮らし～本質を見つけるために～」を開催しました。全国から会員や建築関係者、報道関係者など約140名にご参加いただき、協会活動の紹介のほか、第一線で活躍中の家具作家、建築家によるプレゼンテーションやトークセッションを行いました。設立3年目の協会にとり、知名度向上の点で大きな成果を感じることでできたイベントでした。ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

会長あいさつ

二木浩三会長は、「当協会は、木の魅力によって木のいえの市場拡大に取り組みたい。それには技術だけでなく感性が大事だ。また、木のいえの頂点にあるログハウス市場の活性化が大切であり、協会に『ログハウス部会』を設置した。」と、協会にかける思いを語りました。

協会の取組みと技術情報について

■CLT 技術開発／技術開発委員長 池田 均

池田均技術開発委員長は、協会の新しい取り組みとして、「木材の現わし使用の手引きの発行」、「CLT 小規模・低層・現わし建物の開発」、「薪ストーブの省エネ機器認定」、「ログハウス推奨モデル設計」を紹介しました。「木材の現わし使用の手引き」は、林野庁事業により今年3月に完成した冊子であり、木を内外装にたっぷりを使用した建物の経年変化を楽しむための設計・施工・維持管理の工夫を紹介している点で業界初ともいえるものです。現在実施している継続調査の成果をもとに第2版を作成するほか、顧客向けに木の特性や経年変化の要点を説明する際に使用いただける「要約版」を作成します。

4月に告示化されたCLT工法は3階建て以上の中層建築物向けを主としており、小型・低層の住宅に適用する



司会進行：田鎖理事



開会挨拶：二木会長



池田技術開発委員長



中川ログハウス部会

には課題があります。当協会の中島浩一郎理事は日本 CLT 協会の理事長ですが、同協会と協力して、「小規模低層」「CLT 現わし」に適した設計手法や金具の開発、現わし利用の維持管理手法の確立に取り組みます。

林野庁・国交省・経産省の合同委員会は、2020 年の省エネ基準適合義務化に向けて、薪ストーブの認定基準づくりを進めています。当協会からは需要者の立場で同委員会に参加し、必要なデータの提供などの協力などを行っています。薪ストーブの普及には、規制緩和が必要であり、そうした課題にも取り組みます。

■推奨ログハウス・プリミティブログ／ログハウス部会長 中川 信治

中川信治ログハウス部会長（日本ログハウス協会会長）は、当協会が開発中の「プリミティブ・ログハウス」の取り組みを紹介しました。

ログハウスは、ログキャビンからスタートし、かなり進化しましたが、いま一度原点に戻りシンプルな『プリミティブ・ログハウス』（国産材仕様で約 30 坪、約 1500 万円程度）を開発し、会員を通じて販売できる仕組みを検討中です。建築の経験のない工務店でも取り扱えるよう必要な指導を行います。

業界で活躍するデザイナーによるプレゼンテーション&トークセッション

家具や住宅のプロフェッショナルとして活躍している 3 名のプレゼンターに、「家と暮らし～本質を見つけるために～」をテーマにそれぞれの経験や思いを語っていただきました。



木をいかす家具と住まい～デザイナーから見た経年の味わい

小泉 誠 氏（家具デザイナー）

小泉氏は家具デザイナーとして、建築から箸置きまで生活にかかわるさまざまなデザインなどで活躍を続けています。ご自身の経験をもとに、仕事や木工の道具の話題を紹介しました。そのなかで、素材の「育つ時間」と「使う時間」について、「数億年かけてできた石、鉄等の製品に比べ、木は人間の寿命に近く、ゆっくりと育った木を人間のペースで手間暇かけて加工し、手直しもできるので木の家は心地よいのではないか。」という話は強く印象に残りました。そして「木、紙、畳、竹でできた木のいえは気持ちいい。つまり“木のいえは一番”で

す。」と結び、会場の共感を誘いました。



『住む』より『楽しむ』家づくり～時間と空間～

山中 祐一郎 氏（建築家／BESS チーフデザイナー）

山中氏は、自身が進めている「軒下研究会」を紹介しました。家の内と外を結ぶ中間領域である軒下は、とても大事な存在なのにそれが日本では急速に失われています。東南アジア諸国などでは、外気・風・光を遮断しない建物空間づくりが見られます。それを日本でも復活させたいと考え実践しています。雨の日でも窓を開け放って食事できる家をデザインするなど、軒下を技術面だけで考えるのではなく、暮らしの楽しさに結び付けるところに、経年変化を社会に広めるヒントがあるのかも知れません。

また BESS のデザイナーとしての立場から、「刃落とし」という考えを紹介しました。徹底して妥協のないデザインをしながら、最後にあえてドレスダウンをすることで家を緊張感から解放します。またログハウスは、木のひびや割れを気にせず、「ラフさ」を活かせるし、使うほどに味がでてくるところが、「木のいえ」のテーマに重なります。山中氏は、「家づくりを通して日本の文化を発展させたい。」と、家づくりに対する強い思いを語り、話を締めました。



築 80 年の家、古さを新しい価値に転換する方法

宮部 浩幸 氏 (建築家/SPEAC パートナー/近畿大学准教授)

建築家の宮部氏は、ご自身の仕事で、ツタのからまる古い家をリノベーションした事例を紹介し、古くてもそれを好み楽しむ心構えを持つ人に使ってもらうことが大切だと語りました。また途中までつくられた家を、住み手が仕上げし完成させることで、愛着がわくという商品づくりも紹介しました。

また、「古さを新しい価値に転換する方法」という主題については、古い家の部材や古いガラスを新しい家の建築に活用した事例を紹介しました。新しいものと経年変化をバランスさせること、つまり古い部材が持っている時間の堆積を新しい家に組み込むことで、新しい価値が生まれ、新しい顧客を見つけることができました。

宮部さんは、古さの魅力について、「風も、強い風は不快だがそよ風は心地よい。同じ古さでもそれが穏やかに感じられるようにすると心地よくなる」というのです。そして、「木は穏やかな時間の流れを刻み込むことができる素材であり、それを良いものだと感じさせる工夫をすることで、『木のいえ』を長く使っていただけるのではないか。」と語りました。ここにも、経年変化の魅力が社会に伝えるうえでのヒントがあるように感じました。



進行役の土谷氏 (右から 2 人目)

経年変化を提案する～家と暮らしの本質を見つける～

ファシリテーター：土谷 貞雄 氏

(コンサルタント/建築家/HOUSE VISION 世話人)

土谷氏の司会のもと 3 名のプレゼンターが参加して、テーマについて話し合いました。土谷氏は冒頭、「経年変化を提案するうえで、問題になるのは伝え方だ。」と指摘。小泉氏の作家、デザイナーとしての取り組み、山中氏の「刃落とし」や「ラフにつくる」という考え方、宮部氏の「時間の流れ、古さを大切にする」という発言を確認しながら、「大工さんは、家を建てて家具までつくる能力があるのに、いまは標準化、分業化が進み『作り手』としての

喜びや誇りが持てなくなっている。住まい手の喜びと職人や大工さんの喜びを結びつける工夫が大事ではないか。」という結論にまとめました。

短い時間での話し合いでしたが、経年変化や木の良さを社会にどう伝えるか。それぞれの立ち位置から貴重な提言をいただきました。「経年変化」の魅力を世に広めるという協会の取り組みが、住まい手の喜びと職人さんの喜びを結びつけるうえで、少しでもお役にたつことを期待したいと考えます。

交流パーティー

竹内まりやの「人生の扉」に協会のコンセプトを思わせる歌詞の一節がありますが、北出秀樹理事はこの曲を BGM に乾杯の音頭を取りました。小泉氏、山中氏、宮部氏、土谷氏を囲み、和やかに談笑したり名刺交換する姿、参加者同士で交流する姿が見られました。最後に中島浩一郎理事に締めのごあいさつをいただき当日の全日程を終わりました。短い時間での交流会でしたが、参加された皆様にはこのひとときが、お互いの交流の輪を広げる手がかりになることを期待します。

皆様のご協力、ご支援に支えられて第 1 回ミーティングを終えることができました。ご参加いただいた皆様、司会進行の田鎖郁男理事をはじめ運営協力の方々に、重ねてお礼を申し上げます。協会に対する皆様の理解が一層深まり皆様にご加入いただきますようお願いいたします。どうぞ、よろしく願い申し上げます。(文：事務局)